

# 百人一首に採用された 勅撰和歌集

## 歌の分類を表す「部立」

百人一首の歌が収録された勅撰集は、それぞれ、テーマ別に歌を分類して掲載していました。この分類を「部立」と呼びます。

歌は『古今集』から『続後撰集』の10冊の勅撰和歌集（勅撰集）から採られています。勅撰集とは天皇の命によって編さんされた公式の歌集のことです。

### 古今和歌集 (延喜13~14年/913~914年)

醍醐天皇の命で編さんされた初の勅撰集。撰者は紀貫之ら4名。優雅で繊細な歌が多く、やや遠回しな表現が好まれている。

### 後撰和歌集 (天曆5年/951年)

村上天皇の命による。撰者は源順、清原元輔ら5名。贈答歌や、歌を詠んだ状況などを説明する詞書の長い歌が多い。

### 拾遺和歌集 (寛弘4年/1007年頃)

10首 花山院が自ら編さん（藤原公任などの説もある）。名前は前のふたつの勅撰集からもれたものを拾うという意味。恋の歌が多い。

### 後拾遺和歌集 (応徳3年/1086年)

14首 白河天皇の命による。撰者は藤原通俊。「拾遺集」からもれた歌を選んだ。女流歌人の全盛で、和泉式部ら女性の歌が目立つ。

### 金葉和歌集 (大治元年/1126年)

5首 白河院の命による。撰者は源俊賴。それまでの叙情的な歌よりも写実的な歌が多く、叙景歌を発展させた歌集。

部立は  
歌集の編さん時に作られる

和歌集を編さんする場合、歌はバラバラに並べられるのではなく、テーマごとに分けて分類します。この分類を「部立」といい、古くは『万葉集』から始まっています。『万葉集』では、次の3つに分けています。

- ・ 相聞（恋愛など個人的な思いの歌）
- ・ 挽歌（死者を弔う歌）
- ・ 雑歌（相聞・挽歌以外の歌）
- ・ 恋
- ・ 四季（春・夏・秋・冬の歌）
- ・ 賀（祝いの歌）
- ・ 哀傷（人の死を悼む歌）
- ・ 羁旅（旅の歌）
- ・ 雜（その他の歌）

ただし部立と歌の振り分けは撰者次第で、たとえば恋の歌とも春の歌ともとれる歌をどちらに配置するかなど、撰者の考え方が反映されていました。

### 詞花和歌集 (仁平元年/1151年)

5首 崇徳院の命で藤原頼朝が編さん。新旧の歌風がバランスよく選ばれている。収録歌数が勅撰集の中では一番少ない。

### 千載和歌集 (文治4年/1188年)

15首 後白河院の命による。撰者藤原俊成が「幽玄」を重んじてまとめた歌集。一条天皇の時代以降の歌から選ばれた。

### 新古今和歌集 (元久2年/1205年)

16首 後鳥羽院の命による。院自身も藤原定家などとともに、編さんに関わる。美しく、絵画的な歌が多い。

### 新勅撰和歌集 (文暦2年/1235年頃)

4首 後堀河天皇の命で藤原定家が編さん。政治的な背景もあり、鎌倉幕府の歌人の歌が多い。わかりやすく率直な歌風。

### 続後撰和歌集 (建長3年/1251年)

2首 後嵯峨院の命による。藤原為家が編さん。後鳥羽院や定家など、優雅で絵画的な「新古今集」時代の歌を多く選んでいる。

百人一首の歌が採用された  
歌集の部立

百人一首を部立で見ると、圧倒的に多いのは「恋」の歌で、百首中、四十三首を占めています。歌でのやりとりや、後朝の歌など、当時の恋愛には歌が欠かせなかったためです。

また、四季では、ほかの季節に比べ、「秋」がとて多くなっています。恋と秋は、言葉から豊かなイメージを広げ、しみじみとした余情を感じさせる歌が多いテーマで、定家の好みだったようです。

|    |      |    |    |
|----|------|----|----|
| 春  | 六首   | 夏  | 六首 |
| 秋  | 十六首  | 冬  | 六首 |
| 別離 | 一首   | 旅  | 四首 |
| 恋  | 四十三首 | 賀  | 二首 |
|    |      | 哀傷 | 二首 |
|    |      | 雜  | 十首 |

# 歌の表現を広げる技巧

わずか31文字という短い中にさまざまな意味やイメージを込め、豊かな表現にするために、和歌には多くのテクニックが使われています。

同じ音でいくつかの意味を持つ言葉  
を、効果的に使う技法。例では「因幡  
―往なば」と「松―待つ」のふたつの  
掛詞があり、自然の姿と人の心情が重  
ね合わせて詠まれています。

⑬ 立別れいなばの山の峰におふる  
松 往なば  
まつとし聞かば今帰り来む  
待つ

縁語  
一首のなかに、意味の関連する単語  
をふたつ以上使い、イメージを積み重ね  
て、深みを出す技法。直接的な表現より、  
優美で情緒深いとされています。掛詞  
とともに使われるとより効果的です。

⑭ ながからむ心も知らず黒髪の  
乱れてけさはものをこそ思へ

決まった言葉を導くために使われる、  
主に五音の言葉。調子を整えたり、強  
調したりする効果があります。

⑮ ちはやぶる神代も聞かず龍田川  
から紅に水くぐるとは

枕詞と同じ使い方、音数が多いの  
が特徴。意味でつながる「有心の序」  
発音でつながる「無心の序」があります。

⑯ 序詞(有心の序)  
足曳きの山鳥の尾のしだり尾の  
ながながし夜をひとりかも寝む

本歌取り  
⑰ 「きりぎりす」歌の最後の句は「足  
曳きの」歌と同じ。このように古歌(本  
歌)の一部を取り入れてふたつの歌の  
世界を響き合わせる技法が本歌取りで  
す。定家によって確立されました。